

「**コ**減の刃プロジェクト 2020」

～コロナ禍における福祉事業所の課題解決に協力した経験から～

指導教員：教授 鷹西 恒

担当学生：田中 友也、中嶋 夏海、山田 柚希、山本 雄貴、平井 水奏乃

I. 目的

2020年4月16日、新型コロナウイルス感染拡大を受けて政府は緊急事態宣言を全国に拡大した。富山県内においても富山市の施設にクラスターが確認され、県内での感染リスクに対する緊張感が高まっていた。県内の障害福祉サービス事業所では、サービスの縮小や利用自粛の影響などがあり、対応にも混乱や限界が見受けられる状況にあった。

こうした中、県内の障害福祉サービス事業所に勤務する卒業生から、「活動の制限で困っている。利用者さんを元気にしたい。リモートでのレクリエーション活動を学生のpowerでやってもらうことはできないか？」との相談があった。

新型コロナウイルス(covid-19)の1日でも早い終息を願う私たちのゼミでは、活動の目的として、①リモートで活動を行うことは感染防止や啓発につながる、②利用者や職員に元気になってもらうことが必要と考え、事業所と連携しながら本プロジェクトの企画、製作、運営、実施を行なうことになった。

II. 方法

【障害福祉サービス事業所への事前調査&アンケート】

企画を実施する予定の障害福祉サービス事業所4カ所の職員を対象に、Google Formsを用いた事前アンケート(令和2年10月15日～11月16日)およびリモート(zoom)での事前ヒアリング(令和2年10月14日)を実施した。ヒアリングでは、「外出やイベントが全くできていない、ボランティア・学生など全く来てくれていない、とても寂しい生活、楽しいイベントを企画してほしい、zoomの一つの画面でいろんな事業所の人と楽しくできたらよい」などの切実な思いを含めた意見が職員からあった。期待される内容としては、「見て楽しめるもの、作るものがよい」とのことで、課題としては、「年齢層が広いためどこかの年代に合わせるのは難しい」、「三密を防ぎつつ、みんなのできるもの」などが挙げられた。

【**コ**減の刃～リモートクイズに答えてアマビエ'をつくろう～】

(1) 事業所見学および調査(令和2年10月21日)

事業所の雰囲気や利用者の様子を把握するため、ゼミ生全員で見学を行った。見学ではゼミメンバーそれぞれが、企画を実施する予定場所のスペースを確認したり、利用者の障がい種別や年齢層、これまでやったことのあるレク等についての情報収集を行った(他にネット

ワークシステムの状況や場所の写真撮影も実施)。

(2) 企画の実施

【計画段階】

対象事業所は4カ所(生活介護事業所、放課後等デイサービス2カ所、地域活動支援センター)に決定した。企画について複数回ミーティングを行い、クイズとパズルに加えて疫病退散の伝承を紹介する形に決定した。(使用リモートソフト、PC機材の確認も実施)

【準備段階】

ゼミメンバーの役割分担は、アマビエパネル作成班(田中、山田)、案内ポスター作成班(山本)、シナリオ&クイズ作成班(中嶋、平井、山田)とし、ポスターについては障がい等のある方にもわかりやすいように時間の区切りやルビを入れた。4つのアマビエパネル作成では、人気アニメの登場人物カラーに基づく設定とし、青、緑、黄、ピンクの親しみやすいキャラの妖怪アマビエになるよう仕上げ(完成後にカットしてパズル6Pに整形)各事業所に配達した。クイズは全員で小学生から大人までを対象に作成したものを協議して選び、検証とリハーサルを行った。



写真1 ポスター

【実施段階】 (実施日: 令和2年11月18日 13:30-14:30)

司会(中嶋、平井)、クイズ司会(山田)、写真撮影(田中)、伝令(山本)の分担でPCは2台用意し、進行用とクイズ用で設置場所を変えて準備をした。これは、もしネットワークトラブルが発生した場合への備えで、有線LAN、無線LANの2WAYで対応できる体制を整えた。学生の自己紹介、リモートクイズの説明が終わった後、クイズ担当に司会が代わり、パワーポイントを使って出題する方法を用いた。クイズに正解すると事業所に置いてあるアマビエパネルにピースを貼り付けていく仕組みである。正解が6問に達すると「疫病退散アマビエパネル」の完成となる。

【障害福祉サービス事業所への事後アンケートおよび反省会】

企画を実施した障害福祉サービス事業所4カ所の職員(利用者の代行含)、利用者を対象に、Google Formsを用いた事後アンケート(令和2年11月16日~11月30日)を行った。主にプログラムの内容について問うものである。

反省会(令和3年1月6日)については事後アンケート(Google Forms)の結果および当日の動画を共有しながら、ゼミメンバーが意見や感想を述べる形式で行った。また、ゼミメンバーそれぞれが後日、考察したことをテキストファイルで提出することとした。



Ⅲ. 結果

【事前アンケート】

14名の職員からの回答があり、新型コロナウイルスの影響による利用制限が42.9%、従来は実施していたサービス（外出やレク等）の制限が85.7%、特に影響のあることとして除菌作業の業務増大とレクや外出の制限がともに92.9%を占め、これらが職員の負担と不安を増大させていることが解った。また、職員から見た利用者の様子についての項目では、「イライラしたり不安定になることが多くなった」が42.9%、「普段と変わらない」が64.3%という結果になった。

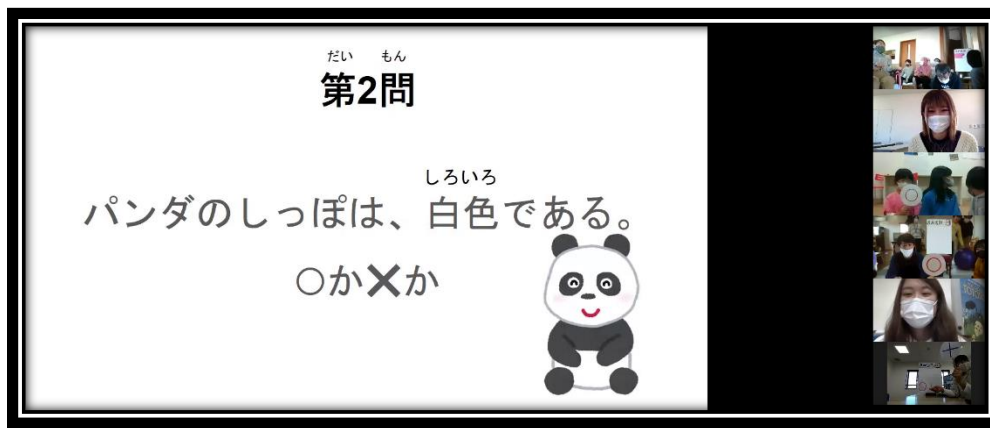


写真3 クイズの進行画面（PC表示）

【コ減の刃～リモートクイズに答えてアマビエをつくろう～】

参加した事業所はA（富山型共生サービス）、B（地域活動支援センター）、C、D（放課後等デイサービス）で、A事業所から各事業所へアマビエパネルの配達、必要物品（両面テープ等）の準備依頼、連絡等を行ってもらった。4つの事業所が接続して安定するまで10分程度かかったが、無事スタートすることができた。司会によるプログラムの説明、メンバーの自己紹介を行った後、パワーポイントで作成したクイズ（写真3参照）を順次展開した。正解、不正解が出るたびに各事業所から歓声があがり、PC画面からも熱気が伝わってくるのが解った。学校の時間割に合わせてプログラムの時間を45分に設定し、時間どおりに終わることができた

【事後アンケート】

15件の回答があり、満足度の項目では満足73.3%、やや満足が20%、普通が6.7%で高い値となった。内容についてよかったところではテーマ、内容が共に60%、リモート実施53.3%、学生対応33%、時間配分20%、進行のスムーズさ6.7%となった。またこのような企画があったら参加したいかでは、思う93.3%、やや思う16.7%であった。

自由記述では、「楽しかったので、また機会があったらお願いします。」、「子どもたちがきている時間(15時ごろ)なら、もう少しみんなと参加できた」、「何かを説明する際、スライドや紙があればより分かりやすい」、「Zoomを使った良い試みだった」、「スタッフも楽しま

せてもらった」などの回答があった。

IV. 考察

(1) “何もできない”とは“何もしない”ことではない

コロナ禍、3密の極力回避、生活様式（マスク装着、会食自粛等）の見直しは、福祉サービス事業所や利用者にとって大きなストレスとなった。しかし、今回、ICT技術を用いることで参加者から笑顔を引き出すことに成功した。経験の積み重ねと工夫次第で様々なプログラムを考案することもできると感じた。

(2) 計画および準備段階（ICT機器の活用等含む）の重要性

利用者の年齢や特性も事前にわからない状態であったが、ゼミメンバーそれぞれの得意なことに合わせて作業分担を行った。アマビエパネルは完成が遅れ、クイズと連動した形でのリハーサルが十分ではなく、当日の進行がスムーズにできなかった。このことは事後アンケートからも明らかである。また、声が聞こえにくい場面や、画面で誰が司会が分からなくなる時もあり、「〇〇さんの話をお聞きください。」などの声かけも必要である。

Zoomの使用に関しては各事業所、ゼミメンバーともに支障はなかったが、たまに接続状況が不安定になり、音声途切れることがあった。計画、準備、リハーサルに時間をかけておくことと、プログラムの内容確認を各自がしっかり行うことが成功のための必要条件となる。

(3) 利用者、職員、学生が“楽しみ”を共有することの意義

利用者、職員の大きな笑い声や表情がPC画面を通じて伝わってきた。主催している自分たちも笑顔になり、アマビエパネルが完成に近づくにつれてワクワク感を共有できたように思う。また、その場にいなくても一体になっている感覚があったと参加したゼミメンバー全員が述べた。これは事業所への事後アンケートで“また参加したい”を選んだ人が90%以上いたことから分かる。楽しい時間の共有は地域で暮らしていく“追い風”になると結論する。

V. まとめ

コロナ禍で停滞していた事業所のレクリエーション活動を活性化することで、利用者に関わる機会をつくり、クイズを交えて盛り上げることで、相互のふれあいが促進されたと感じる。また、重度の障がいがあっても積極的に参加を働きかけ、参加できなくても笑顔で喜ぶ周りの利用者の姿も伝わった（PC画面）。心が動けば身体も動き、笑顔になって参加した人全員が元気になることがわかった。今後も啓発や実践を行っていきたい。

注記等

- 1 アマビエ伝承：香川雅信（兵庫県立歴史博物館学芸員）（<https://kadobun.jp/>角川文庫）
弘化3年（1846）、肥後国（熊本県）の海中に毎夜のように光るものがあり、役人が確かめに行ったところ、海中に住む「アマビエ」と名乗る怪物が現れ、当年より6年の間は豊作が続く

が、病気が流行するので自分の姿を写して見せるように、と告げて海中に消えた。